

ダイバーシティ担当 菊池理事が行く！

学部長・機構長インタビュー

— 人文社会科学部 編 —

これまでのダイバーシティ *Ashina kikuchi*

過去に、原口先生は、ダイバーシティ推進室長を務められていましたね。その頃から、各学部長にされていたインタビューを、今日は、私の方からやらせていただきます。まずは、原口先生が、茨城大学で「ダイバーシティ」を感じた瞬間、また、ホッと安心する瞬間について教えていただけますか。

*Yayoi haraguchi*

過去に忘れられないホッとした瞬間があります。

私は、茨城大への就職が決まったと同時に妊娠がわかり、着任前にもかかわらずどうしたらいいものか、とても不安に感じていました。窓口の先生に電話で相談したところ、間髪いれず「大丈夫です。安心して来てください。」とってくださったことは忘れられない瞬間です。それから、着任前に女性の先生と学内でお話する機会をいただき、仕事と子育ての両立のアドバイスのなかで、その先生から「大丈夫だからね。」という言葉を読んだときは、当時の強い不安が一気に小さくなり安堵したことを今でも鮮明に覚えています。

着任後半年で産休・育休に入ってしまった正直肩身が狭いように感じることもありましたが、嫌な思いをすることもなく、何かあってもあの時の言葉に支えられてきたように思います。

自分自身が救われたように、今は、相談を受ける立場になりましたが、妊娠の報告を受ける際は、「大丈夫ですよ」と、同じように相手が安心できる言葉をかけたいと思っています。

あと、正直なところ、出張に出かける時は、普段の状況から少し離れてほっとする瞬間だったりします。出張先で何を食べようかな、と考える時間が本当に楽しいです。



違う世界に身を置くことは気持ちが変わりますよね。

大学組織としてのダイバーシティ推進事業は、なかなか難しい面もありますが、以前から比べて変化してきていることはありますか？



はい、2015年頃の最初の時期になりますが、ダイバーシティ推進事業を始めたいということで、各所にご説明に伺った際には、厳しいご意見を頂くこともありました。あの頃から比べると、学内でも、以前にはなかった取組が広まって、ダイバーシティ推進自体、珍しいことではなくなっているのを感じます。

人文社会科学部のダイバーシティ



Ashina Kikuchi

学部長として、人文社会科学部のダイバーシティの現状と今後チャレンジしてみたいことはありますか。

Yayoi Haraguchi

学部全体で見ると教員の女性比率が高いですが、学科ごとに見るとそうでないところもあり、学部全体と学科毎でのジェンダー比のバランスを見ていかなければならないと考えています。女性の学生が多いこともあるので、学生の比率を考えながらバランスをとっていく方向で取り組む必要があると思います。



Ashina Kikuchi

女性教員の学部での活躍についてはいかがでしょうか。

Yayoi Haraguchi



原科人文社会科学部長

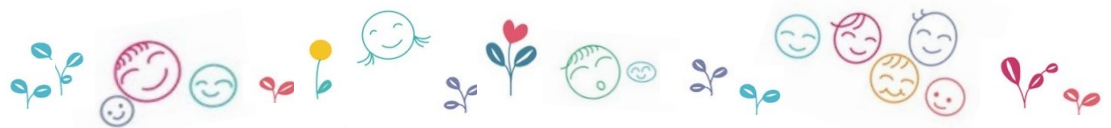
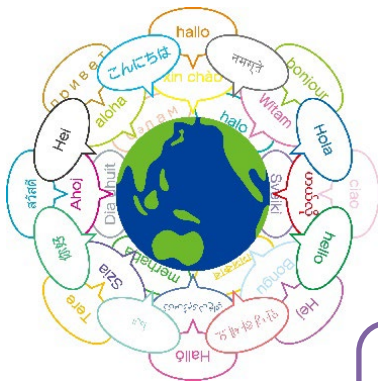
Yayoi Haraguchi

人文社会科学部では、学部長・領域長・専攻長など、女性教員が司会する会議が複数あります。

特に投票で選ばれるところに女性教員がいっぱいなので、学部内でも男女問わず認められて活躍されています。男女のバランスによつての発言のしやすさはあると思うので、女性教員も遠慮無く発言できる状況だと思います。

男性教員を含めて、学部としての女性活躍の意識は高く、妊娠・出産・介護などについても理解があると思っています。

先生方の意識と実際の人員配置などが少しずつ変わっていくことで、実際に流れとして女性研究者が入りやすい環境となったり、学生にも伝わっていくので、長期的に見てもこういった意識というのは非常に大事だと思います。今の状況で教育を受けた学生が研究者になるまでそれほど時間はかからないので、女性研究者を増やすという観点から見ても、今取り組むことが重要だと思います。



Ashina Kikuchi

学部内の国際化についても教えてください。学生の学びの環境として、より広い視野を持つ事ができる環境づくりは大切ですが、現実難しいことも多くあります。人文社会科学部はいかがでしょう。

Yayoi Haraguchi

キャンパスに留学生がいたり、様々なバックグラウンドがある学生がいることは大学の活性化にもいいことだと思いますので、これから学部の中でできるところから展開していきたいです。



Ashina Kikuchi



菊池理事
(ダイバーシティ・国際・SDGs担当)

学生が、日本と海外を行き来するだけでなく、国際化の仕組みや可能性について考えていったりと、今後とも、積極的に人文社会科学部と意見交換させてください。



ワーク・ライフ・バランスと推進室への期待・要望



Ashina Kikuchi

ご自身のワーク・ライフ・バランスはいかがですか。

Yayoi Haraguchi

ワーク・ライフ・バランスは、正直とれていないです。子どもが小さなころは子ども中心で早く帰っていましたので、研究時間が十分とれない時期が続きました。今は子どもも大きくなり、帰る時間が遅くなることも多くなりました。そんな時は子ども達で適当にやっているようです。家族からの期待値も低くなるばかりで、反省することもあり…。ワークライフバランスって、なかなか難しいですね。



時期やその時の状況によって、良いなと感じるバランスもどんどん変わっていきますよね。バランスとは言え、無理に整えるものではない気がします。

私は、振って頂いた仕事を、たまたま受けてきてどうにかなってきたところがありますが、男女問わず教員の状況によっては無理ができず、仕事の依頼があっても様々な理由で断らざるをえない時もあるかと思えます。それでも、状況は常に変わるものだから、一度断られてしまったからと「あの人に振ってもだめだ」とせず、**何度も声をかけ続けて欲しい**と思えます。



声をかけ続けられる大学でありたいですね。

介護やご自身の体調など、**子育て以外のワークライフバランス**に係ることがあるということ、皆さんそれぞれ**色々なことを抱えてお仕事をされている**のだなど、学部長になって情報が入ってくることでわかってきました。

子育てのことは話題になることが多いですが、そうでないことはあまり広く共有はされないの。サポートの制度を使って頂きたいと思えますが、あまり申請される方もいらっしやらないようですね。



子育てに比べ、介護については、当事者から情報共有をいただくことが難しくもあります。ダイバーシティ推進室としては、**情報をしっかり拾ったり、発信したりできる仕組み作り、情報のニーズ**がどこにあるかなど、これから検討していかなければならないと思えます。



Ashina Kikuchi

ダイバーシティ推進室への期待・要望はありますか。

Yayoi Haraguchi

JST補助事業からスタートしたので、女性教員のサポートに関することが多く、最近は職員の方々にも広がっているので良かったと思っていますのですが、**LGBTQ+に関する**ことが気になりながらも何もできなかったことがあります。学生については相談があれば適宜対応していたり、講師を呼んで授業を実施したこともありましたが、教職員については申し出があったのを聞いたりしても、何もできなかったもので、ぜひ取組みいただけたらなと思っています。ダイバーシティ推進室が中心となって取組をして頂ければ、**大学のダイバーシティ**という意味で広がっていくと思えます。



ダイバーシティの新しいチャレンジが始まっています



茨城大学における多様な性的指向と性自認等を尊重する基本理念・基本方針と対応ガイドラインをR4年12月に制定しました。



私達も、そのあたりは大学としてやっていかなければならないと考えています。どのように進めていくのが良いのかについて、大学に集まる皆様方に、アドバイス頂きながら**ダイバーシティの次へのチャレンジ**、進めたいと思っています。今日はありがとうございました。